林業大学校の特徴と学生調査の結果

小川　高広（名古屋大学農学部）

はじめに

林業従事者数減少は下げ止まりの傾向が見られるものの、林業への新規就業者確保は依然として重要な課題の一つである。その課題解決のために、林業への従事を希望する若者らに対する人材の育成が各地で実施されている。その中心的な役割を担っていると考えられるのが、近年新設が相次いでいる林業大学校である。しかし、量的な拡大は進んでいるものの、その教育の現状はほとんど把握されていない。林業大学校の発展について、今後議論していくためには教育の現状の把握が重要だと考えられる。そこで、林業大学校の教育の現状や学生満足度の要因を明らかにするために調査を行った。

方法

相次ぐ林業大学校新設の契機となった京都府立林業大学校を事例として選び、卒業を控えた 2 年生 20 名に質問紙調査を行った。質問項目は出身地域、入学前の経歴など学生の属性に関するものや教育・カリキュラムに対する満足度などである。結果は、単純集計し、教育・カリキュラムに対して、満足と答えた 6 割の学生（教育満足群）とそうではない 4 割の学生（教育不満足群）に分けた。その後、それぞれの質問項目とクロス集計し、満足度との関係性を確認した。

結果および考察

回答は調査対象とした全ての学生から得た。学生の出身地は近畿地方が多く、そのうち半数以上が府内からであった。20 代がほとんどで、入学前の職業は生徒・学生が多かった。最終学歴は高校卒が多く、林業・林学系専攻は 3 割にとどまった。保護者の職業は会社員・団体職員が約半数を占め、林業関係者はほとんどいなかった。

教育満足群の学生には、「教員の指導方法・熱心さに満足」「教務等の事務に満足」「林業大学校を辞めたいと考えたことがない」「学校のことが好き」などの特徴があり、学校には肯定的な印象を持っていた。また、林業には直接関係しない情報リテラシーなどの知識・スキルが向上したとも考えていた。不満足群の学生は学校のことが好きなど満足群と共通の特徴もあった。だが、教員の指導方法・熱心さなどへの満足度は低く、林業に直接関係しない知識・スキルの向上についても、満足群より低い傾向が見られた。林業に関係する知識・スキルについては、満足群や不満足群問わず、9 割以上が向上したと答えた。満足度との関係性は見られなかった。

以上の結果から、満足度には教職員との良好な関係や林業に直接関係しない知識・スキルが関係している可能性が考えられた。不満足群の満足度などを高めていくには、林業に関係する知識・スキルの教育と併せて、林業に直接関係しない幅広い知識・スキルの教育も充実させ、教職員と学生の良好な関係構築に努めることが重要だと考えられる。

今後の課題

対象校は新設林業大学校の先駆的な立場にあり、林業に関する教育は十分に行われていた。しかし、他の林業大学校でも同じ結果が得られるとは限らず、調査学生数も限られていた。さらに教育の現状を探るためには他の大学校についても同様の調査や比較が必要だと考えられる。（本報告には、中部森林学会誌投稿中の内容を含む。）